藍野学院紀要, 第 14 巻, 2000, pp. 73 - 81

〔**Report**〕

School records of the students in Department of Occupational Therapy

—— A follow-up survey at Aino School of Health and Welfare Sciences ——

Tomoko Nishikawa*, Kazuo Higaki*, Kiyoko Ariga*, Shinichi Takabatake*
Aya Yoshida*, Mitsuru Onishi*, Naoko Katsura* and Nobumasa Sakai*

* Aino School of Health and Welfare Sciences

Abstract

One hundred twenty students were divided into 3 groups : (1) general students entered by entrance examinations : 58 ; (2) those entered by recommendation by high schools : 46 ; (3) those entered as members of society : 16, during the years 1996–98, and their school records were compared. It was found that the number of the students who remained in the same class and left school was largest with (2), then (1) and smallest with (3). Moreover, the relationship among the records of entrance examination, age, and high school records, as factors influencing school record, was examined. Significant correlation was found between the school record and the other factors, i. e. the record of entrance examination, the age and the high school records. We thus scrutinized the results obtained in the present study, possibly to modify the methods of the three kinds of entrance examinations in the future.

Key words : occupational therapy, educational evaluation, admission to school, school record

〔調査報告〕

作業療法学科における入学者選抜方法と入学後の経過について

―― 藍野医療福祉専門学校における追跡調査から ――

西川智子*，日垣一男*，有賀喜代子*，高畑進一*
吉田　文*，大西　満*，桂　尚子*，酒井宣政*

【要　旨】 入学者選抜方法が入学後の学業成績に与える影響を明らかにするため，1996年度から1998年度入学者120名を，3群（一般入試入学者58名・推薦入試入学者46名・社会人入試入学者16名）に分け，入学者選抜方法別に学業成績を比較検討した。その結果，入学後の学業成績は社会人入試入学者，一般入試入学者，推薦入試入学者の順に有意に高い結果を示した。また，学業成績に影響を与える要因を入学試験成績，年齢，高校成績と考え，それらの関係を入学者選抜方法別に検討した。その結果，学業成績と入学試験成績，学業成績と年齢，学業成績と高校成績との間に有意な相関が認められた。これらの結果にもとづき，入学者選抜方法の見直しや入学後の指導方法について検討を加えた。

キーワード：作業療法，教育測定，入学，学業成績

Ⅰ．はじめに

当校作業療法学科（以下当学科）は1983年に20名の定員で開校されて以来，卒業後直ちに作業療法士（以下OT）として臨床の場で活躍できる人材の育成を目標として学生の教育を行ってきた。このため，作業療法の教育課程を修了し得る学習能力と職業志向性を持った人材を選抜することは教員にとって重要な業務であり，当学科では入学者を対象に入学後の学業成績と入学者選抜方法との関係を検討してきた（高畑ら，1998）。

当学科では学生の留年・退学率が高く，例えば，1995年度入学者36名の入学後の動向をみると，留年経験者・退学者が18名おり，規定の3年間で卒業した者は半数であった。1996年度入学者38名に至っては留年経験者・退学者が22名おり，3年間で卒業する者は半数以下であった。このように多数の留年経験者・退学者を生ずる原因の1つとして，当学科の進級に関する規定が考えられる。入学後の進級制度は学年制であり，1年間に開講される科目を全て修了しなければ進級できない。また他の原因として，入学者選抜方法が入学後の経過に与える影響も考えられる。

当学科の入学者選抜方法は開校以来行っていた3科目による選抜方法（以下一般入試）に加え，1992年度の定員増に伴い1993年度に推薦入試を，1996年度には社会人入試を開始するなど，選抜方法を多様化しながら，同時に入試科目もそれぞれ独自のものにして現在に至っている。現在の入学者選抜方法を開始して4年が経過し，入学者のその後の経過もおおよそ明らかになってきたことから，現在，入学者選抜方法の見直しが検討されている。しかし，入学者選抜方法別に入学後の学業成績や留年・退学率を比較した先行研究に作業療法学科による研究はなく，検討するため資料が不足している。

* 藍野医療福祉専門学校　作業療法学科

本研究は，1996年度から1998年度の入学者を対象に，入学者選抜方法からみた入学後の学業成績には違いがあるのか，学業成績は入学試験成績や入学時の年齢などの要因でどのような違いがあるのかを知ることによって，入学者選抜方法の見直しや入学後の指導をより効果的に行うための資料を得ることを目的とした。

Ⅱ．対　　象

対象者は1996年度から1998年度の入学者120名であった。ただし，1年途中で退学した2名は除いた。対象学生の内訳は，一般入試入学者（以下一般入学者）58名，推薦入試入学者（以下推薦入学者）46名，社会人入試入学者（以下社会人入学者）16名であった。（表1）

入学時の平均年齢は21.9歳であり，内訳は，推薦入学者18.1歳，一般入学者20.8歳，社会人入学者26.7歳であった。（表2）

1996年度から1998年度の入学者選抜は，11月中旬に社会人入試と推薦入試が，1月下旬に一般入試が行われた。試験科目数や教科目は，社会人入試が英語と小論文，推薦入試が国語を必須とした英語・数学から1科目を選ぶ2科目選択制，一般入試が国語・英語・数学の3科目であり選抜方法により異なっていた。また，出願条件では，社会人入試と推薦入試のみ専願が条件であり，年齢や経歴による制限が課された。ただし，全ての選抜方法における出願条件に，高校成績（評定平均値）の下限は設けていない。その他，選抜方法の詳細については表3に明記した。

表1　追跡対象学生数の内訳

年度	全入学者	推薦入学者	一般入学者	社会人入学者
1996	41（－1）	18（－1）	20	3
1997	38（－1）	17（－1）	16	5
1998	43	13	22	8
計	122（－2）	48（－2）	58	16
1996－8	120	46	58	16

（（－2）：1年途中退学者）

表2　追跡対象学生の平均年齢

年度	全入学者	推薦入学者	一般入学者	社会人入学者
1996	23.0	18.1	20.3	30.6
1997	21.4	18.1	22.3	24.0
1998	21.3	18.1	20.0	26.0
1996－8	21.9	18.1	20.8	26.7

Ⅲ．データの収集と分析方法

入学者選抜方法が入学後の学業成績に影響を与えると考え，学業成績を一般入学者，推薦入学者および社会人入学者に大別し，比較検討した。また，学業成績に影響を与える要因を高校成績，入学試験成績および年齢と考え，高校成績は評定平均値を，入学試験成績は科目得点を，年齢は入学時における年齢を尺度として用いた。

さらに，1年次学業成績と2年次学業成績との関係や，入学者選抜方法別に入学後の動向を比較検討した。詳細は以下の通りである。

（1）入学者選抜方法別にみた学業成績の差

学業成績は，1年次学業成績として臨床実習を除く28科目の得点合計（2,800点満点）を，2年次学業成績として臨床実習を除く24科目の得点合計（2,400点満点）を尺度として用い，入学者選抜方法からみた学業成績の差をt検定（ウェルチのt検定）を用いて比較検討した。なお，1年次学業成績は1996年度から1998年度の入学者を，2年次学業成績は1996年度と1997年度の入学者を対象とした。

（2）学業成績と高校成績との関係

高校成績は評定平均値を尺度とし，1年次学業成績との関係をピアソンの相関係数を用いて検討した。ただし，社会人入学者の一部は高校成績ではなく大学成績等を提出していたためデータが揃わず対象から除いた。

（3）学業成績と入学試験成績との関係

入学試験成績として，国語・英語・数学は素点を，総科目得点合計は平均点を尺度として用いた。なお，総科目得点合計は一般入試と推薦入試の科目数が異なるため，一般入試は3科目の平均点を，推薦入試は2科目の平均点を尺度として用いた。また，推薦入試は国語を必須とし，英語・数学から1科目を選ぶ2科目選択制であること，および社会人入試は英語と小論文

表3　入学者選抜方法

	試験科目 一次［　］内は選択	二次	募集定員	出願条件
一般入試	国語・英語・数学	面接	50%	
推薦入試	国語・[英語・数学]	面接	40%	専願かつ高校卒業後1年未満
社会人入試	英語・小論文	面接	10%	専願かつ23以上か就業年数2年以上

を受験科目とすることから，入学試験の国語（以下入試国語）と総科目得点合計（以下入試総計）は一般入学者と推薦入学者のデータを，入学試験の数学（以下入試数学）は一般入学者のデータを，入学試験の英語（以下入試英語）は一般入学者と社会人入学者のデータを尺度として用いた。

1年次学業成績と入試国語，入試英語，入試数学，入試総計との関係をピアソンの相関係数を用いて検討した。

（4）学業成績と入学時の年齢との関係

1年次学業成績および2年次学業成績と入学時の年齢との関係をピアソンの相関係数を用いて検討した。

（5）1年次学業成績と2年次学業成績との関係

1年次学業成績と2年次学業成績との関係をピアソンの相関係数を用いて検討した。

（6）入学者選抜方法からみた入学後の動向

1996年度から3年間の一般入学者，推薦入学者および社会人入学者の入学後の動向について，各々の留年経験者・退学者の人数を比較して傾向を調べた。

上記の統計処理には「Lotus 1. 2. 3 stat 123 for windows」の統計ソフトを用い，有意水準は危険率5％未満とした。

Ⅳ. 結　　果

1．入学者選抜方法別にみた学業成績の差（表4・5参照）

入学者選抜方法別に学業成績を比較すると1年次・2年次ともに全ての年度において，社会人入学者，一般入学者，推薦入学者の順に高い値を示した。これらの平均値の差は危険率1％未満の有意な差が認められた。

表4　1年次学業成績平均の比較

年度	推薦入学者	一般入学者	社会人入学者
1996	2107.8 ± 171.9	2213.2 ± 164.1	2489.0 ± 36.9
	**	ns	
	***		
1997	2177.3 ± 85.4	2302.9 ± 111.7	2420.8 ± 136.6
	ns	ns	
	***		
1998	2256.9 ± 69.7	2283.2 ± 102.6	2413.4 ± 121.5
	ns	*	
	**		
1996－8	2194.9 ± 114.0	2264.1 ± 111.0	2429.9 ± 119.5
	***	***	
	***		

ns : p > 0.05　*: p < 0.05　**: p < 0.001　***: p < 0.001

表5　2年次学業成績平均の比較

年度	推薦入学者	一般入学者	社会人入学者
1996	1758.5 ± 120.1	1791.0 ± 107.6	2067.3 ± 71.2
	ns	ns	
	**		
1997	1830.1 ± 76.8	1916.1 ± 107.0	2007.4 ± 144.3
	*	ns	
	**		
1996－7	1790.9 ± 108.8	1844.6 ± 123.9	2029.9 ± 125.5
	***	***	
	***		

ns : p > 0.05　*: p < 0.05　**: p < 0.001　***: p < 0.001

次に，入学者選抜別に1年次学業成績を1996年度から1998年度の各年度ごとに比較した結果，一般入学者と推薦入学者（1996年度），社会人入学者と推薦入学者（1996－1998年度），社会人入学者と一般入学者（1998年度）の間に各々危険率1％未満の有意な差が認められた。

最後に，入学者選抜方法別に2年次学業成績を1996年度および1997年度で比較した結果，一般入学者と推薦入学者（1997）の間に危険率5％未満の，社会人入学者と推薦入学者（1996－1997）の間に危険率1％未満の有意な差が認められた。

全ての年度において，社会人入学者は推薦入学者より1年次および2年次学業成績が有意に高かった。

2．学業成績と高校成績との関係（表6参照）

入学者選抜方法別に高校成績と1年次学業成績との相関を調べた結果，推薦入学者（$r = 0.51$　$p < 0.01$）に有意な相関が認められた。

各年度ごとに高校成績と1年次学業成績との相関を調べた結果，1996年度（$r = 0.72$　$p < 0.01$）と1998度（$r = 0.66$　$p < 0.01$）の推薦入学者に有意な相関が認められた。

表6　1年次学業成績と高校成績（評定平均）の相関

年度	推薦入学者と一般入学者	推薦入学者	一般入学者
1996	r = 0.32	r = 0.72 ***	r = 0.09
1997	r = 0.18	r = 0.31	r = 0.001
1998	r = 0.13	r = 0.66 **	r = 0.27
1996－8	r = 0.26 **	r = 0.51 ***	r = 0.17

**: p < 0.01　***: p < 0.001

3．学業成績と入学試験成績との関係（表7参照）

入学者選抜別に1年次学業成績と入試国語，入試英語，入試数学，入試総計との相関を調べた結果，一般

表7　1年次学業成績と入学試験成績の相関

	推薦入学者	一般入学者	社会人入学者
入試総計	r＝0.23	r＝0.34 **	
入試国語	r＝0.26	r＝0.50 **	
入試英語		r＝0.29	r＝0.15
入試数学		r＝0.01	

**：p＜0.01

入学者に，1年次学業成績と入試総計（r＝0.34　p＜0.01）および入試国語（r＝0.50　p＜0.01　）との間に有意な相関が認められた。

4．学業成績と入学時の年齢との関係

1年次学業成績および2年次学業成績と入学時の年齢との相関を調べた結果，1年次学業成績と年齢（r＝0.58　p＜0.01），2年次学業成績と年齢（r＝0.51　p＜0.01）との間に有意な相関が認められ，年齢が高い方が学業成績が高い値を示した。

5．1年次学業成績と2年次学業成績との関係

入学者選抜別に1996年度と1997年度の2年間における1年次学業成績と2年次学業成績の相関を調べた結果，一般入学者（r＝0.80　p＜0.01），推薦入学者（r＝0.61　p＜0.01），社会人入学者（r＝0.92　p＜0.01）において，両者の間に強い相関を示した。

6．入学者選抜方法からみた入学後の動向の調査結果（表8参照）

1996年度から3年間の留年・退学率を入学者選抜方法別に比較した結果，推薦入学者58.6%，一般入学者34.9%，社会人入学者6.7%の順に高い傾向を示した。

表8　入学後の動向

入学形態と人数		留年退学経験者	留年退学未経験者	留年退学率（%）
一般入学者	58	15	43	34.9
推薦入学者	46	17	29	58.6
社会人入学者	16	1	15	6.7
全入学者	120	33	87	37.9

V．考　　察

1．入学者選抜方法が学業成績に与える影響

当学科における前回の研究（高畑ら，1998）では，推薦入試が開始された1993年度から1995年度入学者を対象として，入学者選抜方法別に1年次学業成績を比較し，入学者選抜方法が学業成績に与える影響を検討した。その結果，1994年度入学者において一般入学者の1年次学業成績が推薦入学者の1年次学業成績に比べて有意に高く（p＜0.01），入学者選抜方法が学業成績に影響を及ぼす要因であることが示唆された。しかし，推薦入学者と一般入学者では出願条件により年齢層が明らかに異なるため，学業成績に影響を与える要因として年齢に着目し，入学時の年齢が19歳以下の群と20歳以上の群に二分し，2群における1年次学業成績の比較を行った。その結果，20歳以上の群の1年次学業成績が19歳以下の群の1年次学業成績よりも有意に高い結果（p＜0.01）となり，年齢が学業成績に影響を与える要因であることが分かり，「入学後の学業成績は入学選抜方法よりもむしろ入学時の年齢にかかわる因子，例えば目的意識などに強く影響を受ける」可能性が示唆されたと報告した。

本研究では，社会人入試が開始された1996年度から1998年度入学者を対象に入学者選抜方法別に学業成績の差を比較した。その結果，1年次学業成績および2年次学業成績は，社会人入学者，一般入学者，推薦入学者の順に有意に高いことが明らかになり，入学者選抜方法が学業成績に影響を与える要因であることが分かった。また，先行研究より学業成績に影響を与える要因を年齢および入学試験成績，高校成績と考え，学業成績と各々の相関を検討した。

最初に，年齢が学業成績に与える影響を考察する。本研究において，1年次および2年次学業成績と年齢との関係を調べた結果，有意な相関が認められ，年齢が学業成績に影響を与える要因であることが分かった。

学業成績と年齢との関係に関する研究は末永（1995）と中村（1992）らからも報告されているが，末永らの報告では学業成績と年齢との間に相関が認められず，中村らの報告では25歳以上の群の学業成績が21歳以下の群の学業成績より有意に高いことが認められ，両者の報告は異なっていた。両者の研究には対象学生の年齢分布が明確に示されておらず，研究結果の差の原因については明らかにできなかった。

なお，入学者選抜方法別に学業成績を比較した研究については，医学部では報告されているが，作業療法学科，理学療法学科および看護学科における報告はほとんどなかった。

医学部の研究において，小橋ら（1997）は，センター試験免除の推薦入学者については一般入学者より学力が落ちるのではないかという危惧から，入学者選抜方法別に学業成績を比較したところ，一般入学者に比べ推薦入学者の学業成績が有意に高かったと報告している。また，同様の報告が原田ら（1997）によって

もなされている。原田らは，一般入学者に比べ推薦入学者の学業成績が高い値を示すのは，推薦入学受験者が全体に高い評価を持つこと，推薦入学者は良好な成績を示す女性の比率が高いことを理由として挙げていた。

医学部における報告は，一般入学者に比べ推薦入学者の学業成績が有意に低いとする当学科の結果とは異なっている。この違いを，当学科における一般入試および推薦入試の出願条件から以下検討する。一般入試と推薦入試の出願条件には，専願か併願かという違いがある。ここ数年で養成施設は増加し，当校が位置する府内でも1999年4月現在7校の養成施設が存在する。養成校を選択し得る状況の中で，推薦入試の専願という出願条件は受験者側にとって不利な要因であると考えられる。その上で，推薦入試が2科目選択制であり一般入試に比べ科目が少ないという利点から推薦入試を選択し受験したと考えれば，推薦入試受験者の入学試験において評価された学力の幅が一般入試に比べて低い範囲に分布している可能性が考えられる。この懸念は小橋らの報告でも認められ，「高校側の対策として，一般入試で合格しそうな学生は推薦せず，少し学力の劣る学生を推薦しているのではないかといった危惧を大学側は持っている」と述べている。以上のように，2科目選択制や専願といった推薦入試の方法が，受験者の学力の幅を低い範囲に分布させているのだとしたら，推薦入試の方法を見直す必要性があると考えられる。

次に，入学試験成績が学業成績に与える影響を考察する。当学科の前回の研究（高畑ら，1997）では，1993年度から1995年度入学者を対象に，入学試験成績として入試総計を尺度に用いて1年次学業成績との関係を検討した結果，1993年度入学者にのみ有意な相関が認められた。本研究では，入学試験成績を入試総計のみでなく，入試国語，入試英語，入試数学を用い，各々の学業成績に与える影響を検討した結果，一般入学者において1年次学業成績と入試総計および入試国語との間に有意な相関を認めた。推薦入学者と社会人入学者においては入学試験成績と1年次学業成績との相関は認められなかった。推薦入学者における入学試験成績と学業成績の相関が認められなかった理由として，原田らは「推薦入試受験者が全体的に高い評価を持つために差が表れにくいことが反映している，相関しないのは入学試験成績が狭い範囲に集中している効果である」と述べている。原田らの対象となった「推薦入学者（高校卒業見込みの者に限定）」と当学科の推薦入学者は年齢層が同じであり，入学試験成績と学業成績が相関しないことも同様の結果である。当学科において推薦入学者の入学試験成績と学業成績が相関しないのは入学試験成績が狭い範囲に集中している効果であるといえるかもしれないが，当学科の場合，推薦入学者においては，学業成績が一般入学者に劣る結果となっていることから推薦入試受験者が全体的に高い評価を持つとは言えない。

前回および今回の研究から，一般入学者においては入試総計および入試国語と1年次学業成績との間に関係があることが分かった。これは中村，末永，原田らの報告と同様の結果であった。

最後に，高校成績が学業成績に与える影響を考察する。本研究では，1年次学業成績と高校成績との間に，1996年度と1998年度の推薦入学者にのみ有意な相関が認められ，高校成績が学業成績に影響を与える要因であることが分かった。この結果は中村，末永，原田，小橋らの報告と同様であり，原田らはこの結果に対し，高校間の「学力格差はあっても個々の高校において生徒集団の中で相対的に高い成績を維持する学生は大学教育に対する適応能力をより多く持っている」ことが推測されると述べている。当学科においても同様に考えられる。

2．入学者選抜方法の見直し

現在検討されている入学者選抜方法の見直しの内容は，社会人入試の入学試験科目の検討と一般入試および推薦入試における合否判定の方法が挙げられている。

社会人入試の見直しが検討されたのは，1999年度の社会人入試における受験生の経歴に偏りが生じたことが原因である。例えば，1996年度から1998年度の社会人入試合格者において大学で英語を専攻していた者や英語を使用する職業に従事していた者は1名であったのに対し，1999年度の社会人入試受験生および合格者において大学および短期大学で英語を学んだ者もしくは留学経験者が高い割合を示した。このような偏りは，受験科目が英語，小論文および面接とされていることに起因すると考えられるが，これにより受験者の幅を狭めているとしたら，社会人入学者の質の低下につながる可能性が懸念される。

本研究では，社会人入試の入学試験成績（入試英語）と1年次学業成績との相関は認められなかった。また，入試国語と1年次学業成績との間の相関が一般入学者および推薦入学者の両者において高かったことから，入学後の学業成績を考えると，社会人入試の受

験科目として新たに国語を加えるなど入試科目の見直しを行う必要性がある。

一般入試と推薦入試の合否判定方法の見直しについては次のようなことが挙げられる。従来は1次試験の合格者を入試科目の総得点により決定するが，ボーダーラインで点数が接近しており，科目ごとに偏りの大きい学生がいた場合にどの科目を優先するかなどが議論として持ち上がる。その時の参考資料が得られればと考えていた。今回の結果から考えると一般入試では入試国語の成績を一つの基準として，推薦入試では高校成績を加味して考えることの有効性が示唆された。

また，より質の高いOTを養成していくために当学科の受験倍率を上げる必要性ある。このためには，受験科目を見直すことに加え，現在一部の高校には行っているが，高校に対する当学科の啓蒙活動を考えていくことや，1999年3月に指定規則が改正されたことに伴った教育課程の大綱化を踏まえて当学科の教育の独自性を検討していくことも重要なことであると考えられる（日垣，1999）。

3．入学後の指導方法

当学科は，各学年に担任及び副担任を配置し面接指導などに主として関わっている。

面接指導は，各学年において前期および後期の開始当初に行われ，学内生活や学業成績に関することが主な内容である。当学科では留年・退学率が高いことから成績に関する面接指導は必要不可欠な担任業務であると考えている。

面接指導における意図の一つとしては，学生自身に現在の状況を検討する機会を与え，特に留年する可能性があると教員が認識している学生においては危機感を持たせて問題解決行動をとるためのきっかけを与えることにある。しかし，学生によっては何らかの資料を提示されることなく，教員の経験からくる口頭の説明のみでは，問題解決行動を引き起こすことができない学生がいるようである。

このことから，学業成績に影響を与える要因を明らかにし，入学後の指導方法に際しての資料を得られればと考えていた。また，1年次学業成績が2年次学業成績と相関しているように感じていたため2年生の面接を行う際に資料として用いていたが，今回の結果によりその妥当性が認められたと考えられる。今後，調査を継続していくことや，留年経験者・退学者と留年未経験者に分けた分析を加えていくことで，より確かな学生指導への資料としたい。

1996年度からの3年間の入学者の動向を調査して分かった結果については，前期および後期試験前に学業成績不振者に対して面接指導を行うにあたって，対象者を選出する際の資料になると考えられる。

最後に，当学科における退学・留年率が高い傾向を示す原因を検討する。

原因の1つとして当学科の教育方針が挙げられる。当学科は専修学校である以上，卒業後直ちにOTとして活躍できる人材の育成を第一に考えている。当学科の専任教員は全てOTであり，仲間を育成しているという意識で教育に携わっている。養成校を卒業し国家資格を取得すると，OTとして医療・保健・福祉などの各分野で作業療法を行う。OTが対象者の問題解決へ向けて相談・指導・援助を行うことで，対象者や国・都道府県は決められた診療報酬を医療機関に支払うこととなる。この支払われる報酬に対して同等と認められる結果をOTが要求されるのは当然のことである。つまり，当学科ではこのような幅広い知識を修得し，なおかつ，卒業後直ちに臨床の場で活躍できるOTの育成を目指している。しかし，時間的制約の厳しさがあることも退学・留年率が高い傾向を示す他の原因として挙げられる。当学科は3年制であり，3年間で，指定規則に定められた，総時間3,020時間を越える3,300時間という教育課程を構成している。4年生大学での実際の平均時間が3,677時間（11%増）ということから考えても，当学科の学生は時間的なゆとりがもてない状況にある。この中で，作業療法教育が実施されていることが詰め込み教育となり，学生の精神的・肉体的な負担の大きさに繋がっているのが現状である。前述したように，OTとなるためには幅広い知識の獲得が要求される。今後も，医療を中心とした病院から，老人保健施設や老人ホーム，市町村など保健・福祉の分野へと職域が拡大され，必要とされる知識もより広範なものとなっていく。

当学科の社会人入学者は，入学前にOTが実際に業務に携わっている場面を見学する機会を持ち，OTから直接話を聞く機会を持っていることが入学試験の面接で分かっている。また，入試説明会においてもそのように呼びかけている。つまり社会人入学者においては，OTに対する理解や職業志向性も高いことが窺える。しかし，推薦入学者は入学試験の面接において，当学科を受験した理由を「手先が器用なことを生かしたいので」，「ものを作ることが好きだから」，と述べる者が割合として多く，実際にOTが働く場面を見学したり話を聞いた経験を持つものは少ない。このこと

から，社会人入学者と比較すると推薦入学者のOTに対する理解度は低く，職業志向性に疑問を感じる者さえいる。このようなOTに対する理解度の違いや職業志向性の強さの違いが，今回の入学者選抜方法と学業成績との間に有意な差が認められた原因であると考える。このことは，入学試験における面接の意義を肯定するものであり，推薦入試の面接における基準について見直す必要性が考えられる。

入学後の現在の教育課程では，実際にOTが働いている臨床場面を見学したり体験したりすることが出来るのは，1年次には後期試験終了後2月から3月に行われる見学実習のみとなる。今後の推薦入学者を中心とした入学者の入学後の指導方法として，1年次の早い時期にOTが働いている臨床場面に触れる機会や体験する機会をもち，OTに対する理解を深め，学生の職業志向性に働きかけることの必要性が当学科で話し合われている。本研究で明らかになった1年次と2年次の学業成績の高い相関からもこのことの重要性が示唆される。また，教員が職業志向性に疑問を抱く学生に対し，実際の場面を通して指導していくことの必要性も話し合われている。

入学してきた者全てが規定の3年間で必要な知識や技術およびOTとしての資質を身につけるべく教育を行っている。しかし，専修学校である以上，「OTとして卒業後直ちに臨床の場で活躍する人材を育てる」という当学科の方針は今後も継続し，進級判定および卒業判定を行っていくことは変わらない。

V. おわりに

1996年度から1998年度入学者に対して，入学者選抜方法と学業成績の関係を検討し，学業成績がどのような要因と関係があるか分析を行った。その結果，

（1）学業成績は社会人入学者，一般入学者，推薦入学者の順に有意に高く，入学者選抜方法が学業成績に影響を与えていることが分かった。

（2）入学時の年齢が1年次学業成績に影響を与える要因であることが分かった。

（4）社会人入学者の学業成績が高いのは，入学前にOTに対する理解を深める行動をとっていることなどから，職業志向性の強さが窺えることが要因ではないかと示唆された。

（5）出願条件が，推薦入学者や社会人入学者の学力の幅に影響を与えていることが示唆された。

（6）入試総計および入試国語が1年次学業成績に影響を与える要因であることが分かった。この結果から，一般入試および推薦入試の1次試験合格者を判定する際に資料として用いることの有効性が示唆された。また，社会人入試受験者の幅を広げる手段として科目数や科目の変更を行うのであれば国語を選択することの妥当性が示唆された。

（7）推薦入学者において高校成績が学業成績に影響を与える要因であることが分かった。

（8）1年次学業成績が2年次学業成績に影響を与える要因であることが分かった。

（9）留年・退学率は，推薦入学者，一般入学者，社会人入学者の順に高い傾向があった。

（10）入学後の指導方法としては，1年次の早い時期にOTに対する理解を深める機会を持ち職業志向性に働きかけることの必要性が示唆された。

今回の研究の結果，入学後の学業成績に影響を与える要因が分かった。しかし，学業成績に最も影響を及ぼしている要因については，今回の研究では相関についての検討を行ったのみであったため，十分に知り得ていない。また，留年経験者・退学者の傾向や1年次学業成績が2年次学業成績に影響を与えることは分かったが，1年次学業成績を見て2年次における留年の可能性を予測し得る結果には至っていない。

今後の課題としては，さらなる検討を加え，上記の2点を明らかにしていくことが挙げられる。また，3年次に行われる卒業試験や国家試験の合否に影響を及ぼす要因を調査検討していく必要性が挙げられる。

文　献

浅田春美，関屋 昇，矢野幸彦，宮下 智，山本泰三，森島 健，岡本 豊，小川智美，中川和巳（1996）：理学療法学科学生の入学試験成績と入学後の成績．理学療法学 23：518.

原田規章，中本 稔（1997）：医学部における入学者選抜方法と入学後の経過について（1）入学形態と入学後成績，進級，国試合否との関連．医学教育 28：35－40.

原田規章，中本 稔（1997）：医学部における入学者選抜方法と入学後の経過について（2）入学後の経過に及ぼす要因の多変量解析．医学教育 28：77－83.

日垣一男（1999）：カリキュラム大綱化に伴う課題とチャレンジ —— 3年制専修学校の場合 ——．OTジャーナル 33：959－966.

小橋 修，高崎光浩，十時忠秀，金関 毅（1997）：推薦および一般選抜入学の学生の学内成績，医師国家試験成績の追跡調査．医学教育 28：23－33.

中村伴子，山田拓実（1992）：作業療法学科入学生の入学試験成績と学業成績との関係について．作業療法

11：366－370.
末永義圓，真木 誠，吉田直樹，河野仁志，村田和香，深沢孝克，大宮司信，丸谷隆明，上野武治（1995）：本学作業療法学科学生の入試成績と入学後の学業成績に関する調査研究．北海道大学医療技術短期大学部紀要8：23－27.
高畑進一，日垣一男，有賀喜代子，吉田 文，大西 満，桂 尚子，西川智子，西尾和子，石黒 望，宇野恵美子（1998）：入学者選抜方法と学内成績の関係．藍野学院紀要第（11）：69－76.